

浄

monthly
JŌDO

土

11

November 2006



法然上人鑽仰会



みな人のおのれとおのが智慧に
迷いて、近き極樂を遠くし、

かほどやすき世間を苦しみとなす
ことは浅ましきことなり。

浄土

2006/11月号 目次

日本仏教の再生は可能か

法然上人の再来を求めて(最終回)	上田紀行	2
江戸を歩く	森 清鑑	12
仏教コラム	大室了皓	25
会いたい人 和田誠さん①	関 容子	26
響流十方	袖山榮輝	34
シネマ随想「手紙」	袖山榮眞	38
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猓下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会
主催講演会

日本仏教の
再生は可能か

法然上人
の再来を求めて

Ⅲ

最終回

上田紀行

この現代において仏教者が何をなすべきかということに目をつぶっていてはいけなと思います。ただ、「すべての人は救われる」と言っていればいいのかということだけでは、大きな問題だと思われます。

この現代社会は、これだけメディアが発達していますし、私たちは何かができるという可能性を持っている時代ですので、何をなすべきかということを大いに考える必要があると思っています。

そういう意味では、私は『がんばれ仏教!』（NHKブックス）で書いたことの中に、縁起に生きるお寺を五つ取り上げています。

例えば、信州の神宮寺というお寺さんは、高橋さんという有名な和尚さんですが、チェルノブイリで原発が爆発して、たくさんの子供が白血病になっているといったとき、矢も盾もたまず、信州大学の先生を連れて向こうに出かけました。

真っ先に行ったことで、向こうも感激し、信州大学の先生も感激して、それから三十六回もチェルノブイリに行くことになったということです。

そして、向こうから子供を引き取ったりして、檀家さんの家にホームステイさせたりしました。檀家さんはそれで「ひどい寺だ」と言うのかと思ったら、自分たちにも慈悲心があることに気づくわけですから、みんな喜んだということです。

かわいそうな白血病の子供たちを何とか救えないかということ、自分たちも力を尽くすことができたんだといって、非常に喜んだわけです。

一方、タイとかスリランカの仏教を、大乘仏教の人たちは、乗り物が小さいと言って非難したわけですが、今の仏教界を見れば、実は、スリランカとかタイの仏教のお坊さんは、かなり大乘的です。ホスピスをつくっている方も多いです。



そういうお寺を見たときに、どうして日本仏教は大乗仏教なのにこんなあり様で、小乗仏教と非難していた国の仏教界の人たちが、エイズの人たちを助けていたりするのかということに、衝撃を受けたということです。

この高橋さんは、タイに行つて、奥さん方を助けました。つまり、旦那さんが買春などのためにエイズになり、早く死んでしまう。気づいた時は奥さんにもエイズが移っている。いつ死ぬかわからない、子供もまだ小さいので不安な思ひの奥さんに、ミシンを与えて、そこで作務衣を縫ってもらい、それを日本のお坊さんたちに売ることで、タイのエイズの人たちを助けるということをしています。

この人は臨済宗です。宗門は何も言いませんが、周りのお坊さんたちは、この高橋さんのお父さんは大変有名な禅僧でしたので、よく言われる言葉が、「あんなことをやっているけれども、禅の境地としては低いね」ということでした。

そして、「おたくのお寺では、坐禅会をやっているんですか」とか「教化活動を何もやってないじゃないですか」と言っていたということです。しかし、檀家さんはそのお寺をものすごく支持していますし、周りの地域社会も、彼に本当に仏の御心があるんだ、ということを確信しています。

仏教というのは、その人の仏教的境地に偏差値をつけるためにやっているんでしょうか。衆生の苦しみを身を粉にして、菩薩となつて、救うという誓願を立てたのが菩薩じゃないのか、そこから発している大乘仏教が、悟りの境地が高いの低い、こっちのお父さんのほうが境地が高くて、あんたのやっていることは仏教じゃない。何故かという坐禅会をやっていないし、教化活動をやっていないからだというわけです。そんなことでいいんでしょうか。私はそういうことを言いたいわけです。

全国に六万の寺がありますが、その寺には、本当にそこに仏の慈悲に満ちあふれている場があつて、困っている人の声を聞き届けてくれて、何らかの行動を起こしてくれているというところが、全国にいくつあるでしょうか。この数はコンビニの数より多いです。公民館は二万ぐらいですから、それよりもはるかに多いんです。

こういうお寺が生まれ変わるとすれば、どういう国になるだろうかということを、私は考えざるを得ないのです。

お寺が生まれ変わる

今度は、曹洞宗のお坊さんのお話をしたいと思います。

有馬実成さんという人で、「曹洞宗ボランティア会」というものをつくられた方です。駒澤大学を出た山口の方で、この会の事務局長をしておられました。これは東南アジアの貧しい子供たちの教育支援を行うボランティアの会で、二十五年位前にできたものです。

この方を知っていて、対談などもさせていただいたんですが、まだ六十三歳でしたが、六年前に亡くなられてしまいました。

私はこの「がんばれ仏教!」という本を書いていたときだったんですが、この有馬さんの姿を一人でも多くの人に知っていただだけで、この本を出す価値はあると思って、やっと本が書けたということです。

この有馬さんがこの「曹洞宗ボランティア会」を始めたのは一九八〇年ぐらいのことですが、そのときまでは、山口のお寺の住職でした。そして、曹洞宗の若手僧侶としてカンボジアの難民のキャンプに派遣されました。

当時、ポルポト政権という、人権を非常に抑圧した政権が崩壊して、大量の人間がタイ

に出てきました。難民キャンプにきたけれども、そこはもう毎日五十人も百人も死者が出るような、飢饉と伝染病の巣窟のようなところでした。

曹洞宗もそこに人を送ろうということ、若手僧侶たちを送ったわけです。しかし、何もやることなく、若手僧侶たちは本当に絶望したということです。何もやれることがなかったんです。

目の前で死んでいく人に対して、ただお経を読んでどうなる。今必要なのは医療品であつたり、食べ物であつたりするわけですが、そこはもう餓鬼草紙のような、地獄絵のようなところだったそうです。

ですから、「何もできることがない」ということで、帰ろうとしたときに、ある一つのことがありました。有馬さんはこのように書いています。

ある一人の少年に出会いました。名前はランソンと言います。十歳です。父親は撲殺され、母親とは国境を逃げる途中ではぐれましたが、銃弾に当たって死んだのを目撃したという人がいます。

どういうわけか、私の後をついて歩くのです。聞けば、殺された父親に私がよく似ているということです。一緒に歩いていると、ランソンは遠慮がちに、そっと私の手に触れてくるのです。その顔を見ると、下から見上げながら、にこっと笑いかけてくるではないですか。その笑顔の美しかったことといったらありません。そして、その笑顔で私の心は救われました。

難民の目に、その表情に、二度と微笑みは戻ってこないのではないかと思っていたのです。うれしくなつて、その手をぎゅっと握ると、ランソンも力いっぱい握り返してきます。思わずその肩を強く抱き寄せたのですが、そのとき私は思ったのです。カンボジアの国で

生きていくことに絶望し、国を捨ててタイに逃げ出ることを余儀なくされた人たち。難民はまさに、出口のないトンネルの中を歩くほかはないのです。そんな人たちは、何に希望を持って生きていけばよいのでしょうか。

絶望のどん底にあえぐ人たちに、今のランソン少年の見せてくれたような笑顔を取り戻してやることはできないものでしょうか。子供は、未来への希望の象徴なのです。もし、子供たちが、この難民キャンプで元気に遊び、元気な歌声を響かせるようになれば、大人たちも明るい表情を回復するに違いありません。

自分のお父さんにそっくりだと言って、一人の少年がついてきた。そして、手を握り返したらにこっと笑った。子供たちがこういう笑顔を取り戻してくれば、今、意気消沈している大人たちも絶対元気になる。子供たちの支援をやらうと決めた一瞬でした。

そして、その後、彼らは日本に帰って、そして、カンボジアに行ってひたすら子供の絵本を集めます。ところが、ポルポト政権というのは本を焼いてしまった政権ですから、絵本がほとんどありません。絵本を何とか復刻します。

そして、日本の絵本を大量に買って、日本語のところをカンボジア語に訳してひたすらコピーで張りまくって、即席カンボジア語の絵本をつくって、そしてトラックを移動図書館にして、難民キャンプを行脚したわけです。

子供たちに笑顔が戻ってくる。大人たちも明るくなる。そういうことを続けていたら、曹洞宗の宗門が、「犠牲者も出ていないし、もうここら辺で援助はやめましょう」と一年で言う。「やめられないでしょう」と言って、青年僧侶たちが「曹洞宗ボランティア会」をNGOとして設立したということです。

私は、こういう歴史は少し知っていましたが、有馬さんの人生というものを知らずに、



遺稿集を見ました。そうすると、有馬さんは、なぜこういう人になったのかというと、お寺のご住職の子として生まれたのですが、自分が七歳のときに、お父さんが太平洋戦争に出征してしまいました。

そして、一年後に上海で戦死してしまうわけです。そして、有馬さんを筆頭に、四人の兄弟、お母さん、そして、先代の住職夫婦であるおじいちゃん、おばあちゃんが露頭に迷うことになって、寺を出なければいけなくなりました。

そのときに、七歳の有馬さんが、「僕が寺を継ぐので、おじいちゃん、もう一回住職に復帰してください」と言って、おじいちゃんはかなりもうろくしていたみたいですが、戻ることになりました。

このような貧困のどん底で何とか苦学して、そして寺に戻ってきたのですが、寺はほろほろなので、いろいろな復興をします。そうしたら、そこで在日朝鮮人の方のお骨というのが、寺の中にあることに気がついて、引き取り手がないということがわかりました。

朝鮮人の方は、自分の故郷にお骨が戻らないと成仏できないという信仰があることをほかの方から聞いて、「これはいけないことだ」と言って、山口県内のお寺に「お宅には在日朝鮮人のお骨がありませんか」と呼びかけました。そして韓国政府に掛け合って、ソウルの丘に、共同墓地をつくってもらって、そこに遺骨を送還するという運動をなさったわけです。そして、その直後に、このカンボジアに出会ったということでした。

貧窮孤独の姿

有馬さんは仏教者の中で誰が心の支えになっているかというのと、真言律宗を興した叡尊という方だそうです。鎌倉時代に西大寺を復興した人です。

観尊はどのような方かというところ、弟子のお坊さんたちを引き連れて、ハンセン病の村とか、一番貧しいスラムとかに行って、そこで、皆さんをお風呂に入れたり、お粥を与えたりして供養なさっていた方です。その観尊の言葉を、有馬さんはこのように引いています。観尊は弟子たちにこういうことを言っています。

「文殊師利涅槃經には、生きている文殊菩薩に会おうと思うなら、慈悲心を起こせ、と書かれています。なぜならば、文殊菩薩がこの地上に出現するときは、必ず貧窮孤独の衆生の姿となつてあらわれるからである。貧窮孤独の人に出会い、無関心で会ったり、忌避していたり、慈悲心を持たない人は、文殊菩薩と出会いはなから、ついに文殊菩薩と出会えないのです。」

さて、ここには、差別され、抑圧され、家族からも社会からも見捨てられた貧窮孤独の人々が、肩を寄せ合つて生活しています。しかし、その人たちこそ、我々に慈悲の心を起こさせるために地上にあらわれたもうた文殊菩薩なのです。文殊菩薩に食事の供養を差し上げ、入浴をしていただきましょう。文殊菩薩の背中の垢を擦り、供養させていただきましょう。」ということなのです。

つまり、「お坊さんたちが菩薩で、身を粉にして衆生を助ける」というのが普通の考え方ですが、「貧遇孤独の人の中にこそ、私たちの慈悲心を覚醒させてくれる文殊菩薩様がおわします」と、反対のことを言っているわけです。そして、そういう活動をなさってきました。私たちの菩薩道の原点というのが、私はここにあるような気がします。

この鎌倉の時代というのは、先ほども申しましたように、法然上人がまさにすべての人の救済ということを考えて時代です。そして、観尊という人が、「困っている民衆の中にこそ、菩薩がおわします」ということを言った時代でした。すごい仏教によるすごい時代

だったかと思います。

しかし、この右肩上がりの日本経済が終焉したこの平成の時代にこそ、もう一回、“平成時代”というような、仏教の教えというものを我々が考え直す時代が来るといいのではないかと思われます。

仏教というのは、まさに縁起の声を聞くという教えだと思っています。そして、現代の法然上人というのがあるとすれば、それは、一人のスーパースターというのが生まれるのではなく、我々一人一人が、まさに法然上人のような、「我々の父は何であつたのか」、そして「この時代は何であつたのか」という、我々の中の縁起の声を聞くという、そのことから、まさに法然上人を継承していくということでありましよう。一人一人が法然上人の心を継いでいく。そして、「無条件に、生きてきた中での自分の可能性を生かしきる」ということにこそ、法然上人の教えがあるのではないかと思われます。

最後に、私は、『生きる意味』（岩波新書）の中に書かせていただきました、車椅子の詩人であるおぞねとしこさんという方の「花」という詩を読ませていただいて終わりにしたいと思います。この方は、車椅子という条件があると何もできないと思っていた方が、命に生かされている中で、だれだって可能性があるんだ、ということに気がつかれたときに、詠まれた歌です。

さあ涙をふいて

あなたが花におなりなさい

あなたの花を咲かせなさい

探しても探しても

あなたの望む花がないなら

自分がそれにおなりなさい

さあ涙をふいて

あなたが花におなりなさい

あなたの花を咲かせなさい

探しても探しても

あなたの望む花がないなら

自分がそれにおなりなさい

私は、この増上寺でこの「花」という詩を詠ませていただくというこの縁起に対して、大変心から感謝していますとともに、「涙をふいて、あなたが花におなりなさい」という、どこかに花があると思うのではなく、これだけ豊かなんですから、一人一人がその花になって、まさに法然上人のように、「周りの人にも花があるんだよ」という一言を、若者にも伝えていく、年老いた方にも伝えていく。そういう世の中になればいいと思っています。勝ち組と負け組を分けて、負け組はもうどうしようもない、とってしまう世の中ではなく、まさに、涙をふいて、あなたが花になっていく、という日本になっていけば、どんなにすばらしいだろうかと思えます。

私の目の黒いうち、皆さんの目の黒いうちに、そういう方向に本当に近づいていくような動きというものが、この平成の世に生まれていったほしいということを、心から願っております。

（おわり）

上田紀行（うえだ のりゆき）

1958年東京生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。専攻は文化人類学。現在、東京工業大学大学院助教授（社会理工学研究科・価値システム専攻）。著書に『生きる意味』（岩波新書）、『がんばれ仏教』（NHKブックス）、『癒しの時代をひらく』（法蔵館）、『宗教クライシス』（岩波書店）、『スリランカの悪魔祓い』（徳間書店）、『覚醒のネットワーク』（カタツムリ社）など。町田宗鳳と共著『生きる力としての仏教』（PHP新書）

江戸を歩く

増上寺から
東海道 鈴ヶ森まで

第一回

森 清鑑

増上寺領

江戸時代、芝増上寺領は広大であった。総門の芝大門から南北（横方向）は、古川から日本赤十字社まで。東西（縦方向）は、東京タワーまで。大門を軸に左右上下に線引きした、長方形の縦が大きく膨らんだ、ほぼ正方形に近い面積の全てが浄土宗、東の大本山、増上寺領であった。その寺領二十五万坪。

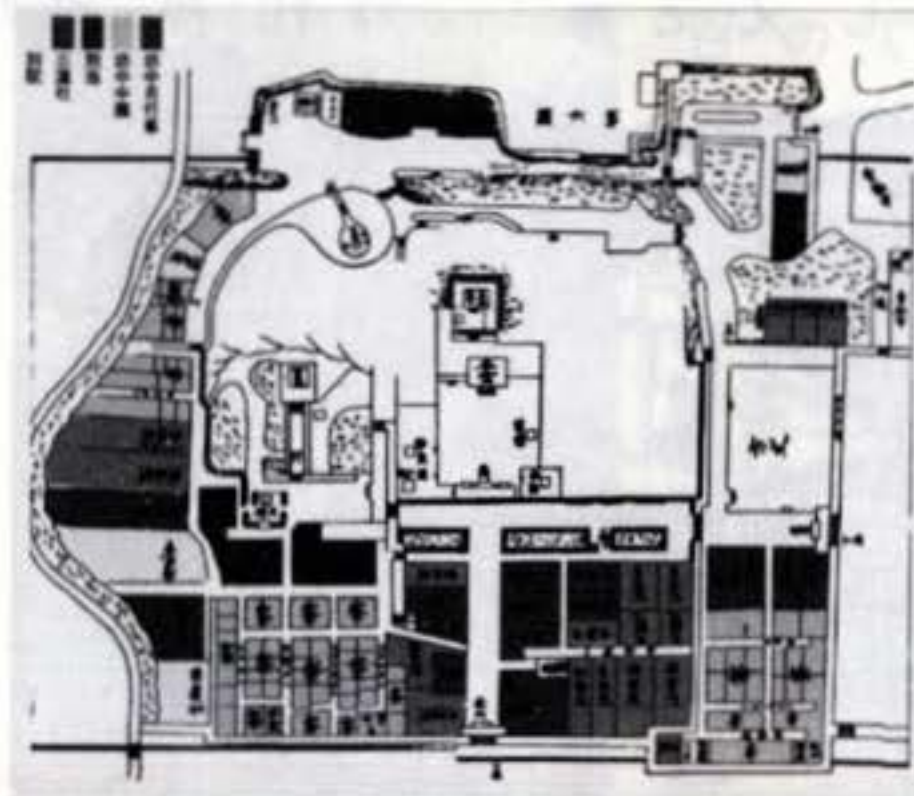
その広さを実感するために芝大門から一周してみた。江戸時代の様子（文政二年一八一九）と現代（括弧で示す）を重ね合わせる。芝大神宮の裏を通り、長い練堀と川に沿って右に左に行く。堀の中の学寮（日本赤十字社）に沿って左折、御成門へ。御成門の角には源流院。門を過ぎると大方丈（明治五年、札幌農学校の始まりとなる開拓使仮学校、現芝公園、御成門小学校）の堀。方丈の裏には三蓮社。松蓮社、鑑蓮社、岳蓮社及び安蓮社が並ぶ。安蓮社には増上寺開山の大蓮社西誉上人以下歴代の墓がある。そこ

から迫り上がる坂道が芝切通（右の青松寺との境道）。鎌倉の切通と同じく、天涯の山道。登り切ると薬師堂（後に岳蓮社、現芝学園）。金地院（東京タワー）の裏を通って右手に子院の真乗院、通元院。下ると、蓮池弁財天中之島。以下、妙定院から西蓮社まで赤羽川沿いに（赤羽橋から将監橋まで）子院、学寮がずらりと並ぶ。将監橋の角を左に。学寮の堀を見ながら芝大門に戻る。すなわち、子院（本寺を維持し、

共生してゆくための施設）と学寮は本殿伽藍や將軍靈廟をぐるりと取り囲み、配置され、増上寺を機能させていた。

地形

芝増上寺は、江戸城を挟んで上野の寛



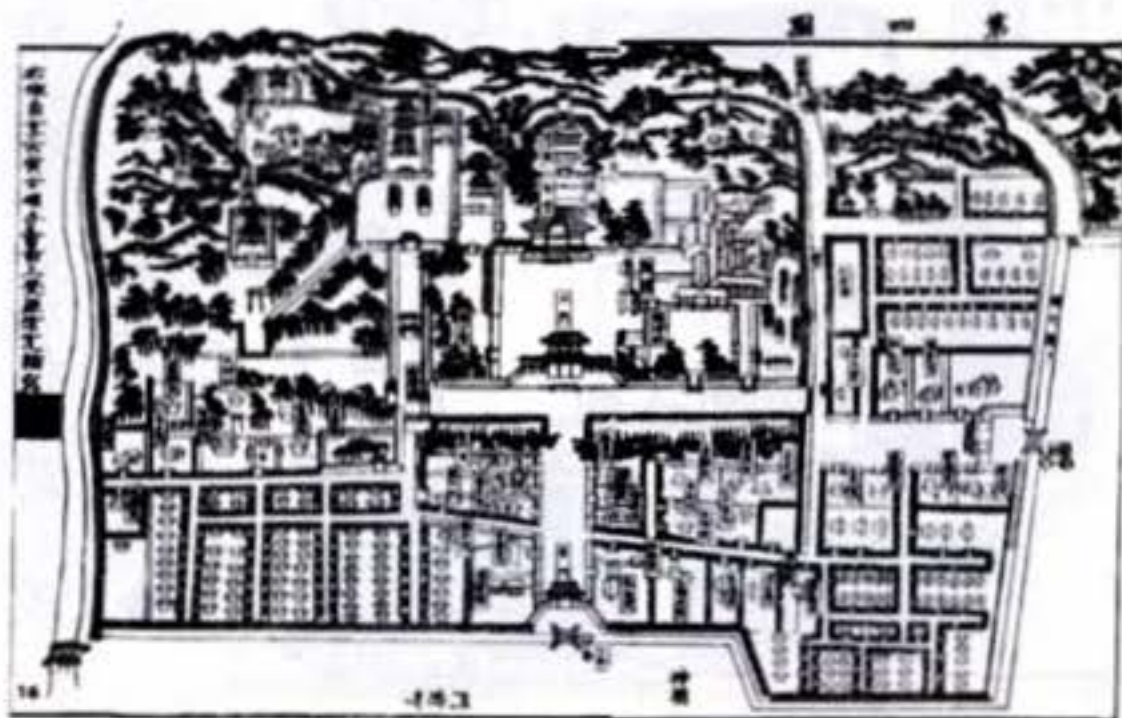
◆文政二年の山内

永寺に対し裏鬼門を封じる位置にある。家康が来る前の原地形は、前面に海、後方に愛宕山台地から連なる丸山の丘陵、南は、赤羽川（新堀川、現在の古川）。鎌倉から戦国時代、多くの寺社が元は城塞であつたように、この原地形からは、江戸城を守る要塞の条件をすでに備えていたと推察される。加えて、この地形は武蔵野台地が海に接する第一級の景勝の地でもあつた。このことは、三門から直に眺望できる江戸湾の美しさや五重塔を介して描かれた赤羽川周辺の広重の絵からも容易に想像できる。

天正十八年（一五九〇）、家康は江戸に入府すると、増上寺を徳川家の菩提寺とした。そして、当時、平河町、紀尾井町辺りにあつた増上寺を慶長三年（一五九八）に芝に移転し、広大な寺領を与えた。家康の度量の広さと決断力には驚き入る。なぜかと言えば、天下分け目の戦、関ヶ原の戦い（慶長五年一六〇〇年）の二

年前のできごとであつたからである。以後、増上寺は、徳川將軍家の精神的支柱として、また、江戸を守る表玄関としての役割をも担つた。

本稿は増上寺を起点として江戸時代の情景を文章でビジュアルに再現したい。最初に増上寺から鈴ヶ森までの、東海道に沿った西の表玄関の情景から取りかろう。本初稿ではまずは江戸時代の増上寺がどのような実景であつたかを想像する。



◆ 1686年の境内

江戸庶民の参詣

東海道を大名行列が通っている。道沿いや広場に座して見送る庶民。東海道に面して、広場と言ってもよいほどの空間。中央奥に赤門がある。広場の右側には、石垣と土手が広がり、松林の背後に芝神明宮の社が見える。左側は民家できつちりと区画整理されている。その正面奥の朱色の門が増上寺の正門、芝大門である（二代目広重絵）。芝大門は、家康が平川城（後に江戸城）大手門を移築したもの。風格のある高麗門である。江戸庶民の目で増上寺を参詣してみよう。大門の前には川が流れている。広大な増上寺は、練堀と川に囲まれていた。橋が見える。橋の右横には下馬札が立っている。ここで馬を下りなければならぬ。大門の前の景色は、増上寺門前町の光景をよく示している。門に向かつて民家の角を左に曲がり、川沿い、堀沿いに行けば赤羽川、将監橋にでる。この道も江戸庶民のルートで道幅もむしろ東海道より広い。

大門から出て行脚に向かう僧侶の一団、武士、町民。人々の往来が目立つ。道が広場のように広いのは、明らかに増上寺を火災から守る広小路の役目を果たしていたと思われる。

橋を渡って大門をくぐり、参道に入る。正面、遠くに三門がどんと聳えている。大門から三門までの

距離は、百八煩惱を表す百八間（約百九十五メートル）。

この参

道も広い。道の

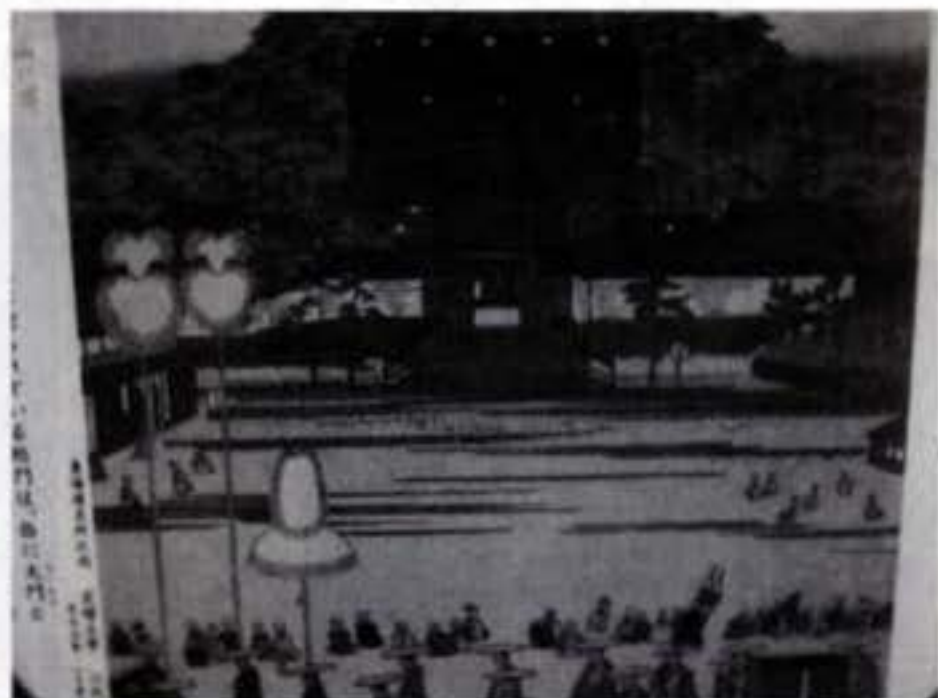
左右は練堀。左

の堀の中はおび

ただしい数の学

寮。右は常照院、

広度院などの子



院、そして学寮。練塀が切れると、そこは松原^{まつはら}である。現在でも公園として面影は残るが、三門前の広大な横空間に三つに仕切られた段囲いに美しい松の木が枝を伸ばしていた。三門（三解脱門）は今日も偉容を誇っているが、これは生活の三悪、「貪欲、嫉妬、愚痴」を解脱する門で、くぐればこれらは霧散し、おかげさま生活の善男、善女になる。

三門の前にも小さな川があり、渡って中にはいると眼前遠くに本堂（大殿）。三門から本堂までの距離は、如来の四十八願にのつとつて四十八間（八十六メートル）。左に開山堂、右に鐘楼堂。この大梵鐘は日本三大名鐘のひとつである。その鐘の音は江戸庶民に時を伝え、空気が澄んだ日には、江戸ばかりか遠く木更津沖まで聞こえたという。まさに「今鳴るは、芝か、上野か、浅草か」である。そして本堂の後ろに護国殿（黒本尊）があつた。家康はここに奉られている黒本尊阿弥陀如来様を携えて戦場に赴

いたとされている。

本堂の参詣を済ますと人々は、三門の練塀に沿って赤羽川の方向に歩く。左手の松原の端に流れる川。この極楽橋を渡ると右手やや奥まった所に、二代將軍秀忠の台徳院廟惣門が見える。さらに行くと、安国殿（後の東照宮、家康を奉る。安国殿は家康の法名）

そしてその後方、丸山に五重塔。丸山の後方、高台から下がった裏地には、蓮池弁財天があり、そこからの引き水が丸山をぐるりと囲むように安国殿の前まで張り巡らされていた。五重塔近辺は桜や梅の景勝の地で塔に登って景色を楽しむ人々の姿を広重は描いている。



学寮

芝大門から松原までの直線をそのまま左右（南北）に広げた、現在の古川から日本赤十字社までの、広大な長方形の社領には、子院に混じって、おびただしい数の学寮がひしめいていた。その数、百数十。学寮には、全国から集まった、三千人もの学僧が学んでおり、現代でいえば、これは紛れもなく学都である。また、それは神田の学問所、昌平黌に匹敵する規模である。

將軍の御霊屋（おたまや）

増上寺には、二代秀忠（台徳院）、六代家宣（文昭院）、七代家継（有章院）、九代家重（淳信院）、十二代家慶（慎徳院）、十四代家茂（昭徳院）の六代の將軍とその奥方が奉られていた。大きく分けると、三門、本堂の練塀で囲まれた広大な増上寺本殿領に向かって、左側のこれま

た広大な敷地に二代秀忠のみの南廟、右側にその後続く將軍の北廟があつた。北廟は、文昭院と有章院の二天門が並列に立っており、そこから西の縦方向の敷地に壮麗な御霊屋が建造された。七代家継は、わずか七才（二七一六）でこの世を去り、法名、有章院となつた。この頃は、江戸華やかなりし元禄の経済の風が残存し、壮麗な御霊屋が建造された。そしてこれを最後に他の將軍は合祀されることになる。

將軍は、江戸城から徳川譜代の大名屋敷を抜け、御成門から参内した。御成門は、現在の御成門交差点辺りにあり、江戸城に向かって立っていた。御成門の前は、広小路で馬場があつた。門の前にはここにも増上寺をぐるりと囲む川（櫻川）があり、橋を渡って門をくぐる。すると右手に、塀に囲まれた大方丈の棟が続いている（現在、芝公園と御成門小学校）。將軍の参詣は、この大方丈で準備を整えるところから始まる。そして、増上寺本殿での法要の後、広い

参道の風雅な松林（松原）沿いに南に進み、台徳院殿に至る。まずは台徳院殿から描写したい。

台徳院殿（徳川秀忠）

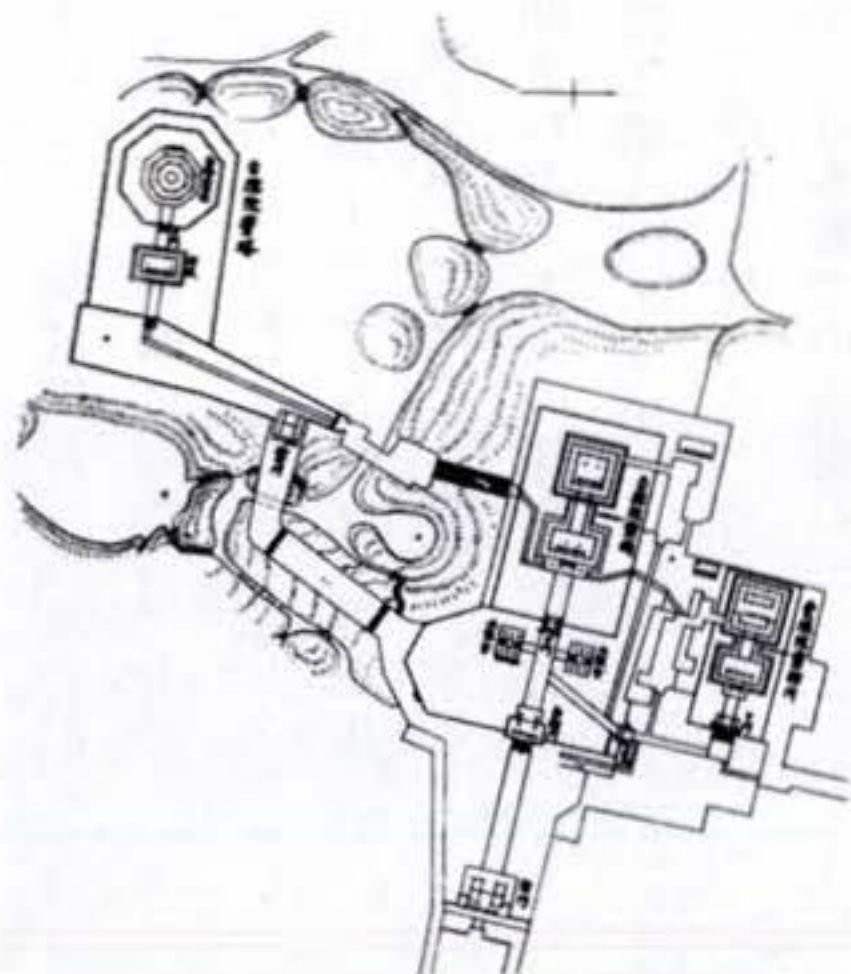
家康の葬儀は、遺言にしたがって増上寺で行われたが、増上寺に最初に葬られた將軍は二代秀忠であつた。三代家光は、総力を傾けてこの御霊屋を作つた。歴代の將軍にとって最も神聖な廟である。それは徳川家霊廟の中で最も壮麗とされる日光東照宮の先驅をなすものであつた。現存するのは、入り口の惣門のみ。江戸期において、その位置は、もつと奥まつたところにあつた。惣門は、最近、修復を終え、荘嚴、華麗な姿が復活した。惣門をくぐる。そこに展開される、近年、公園として再整備された全地域が御霊屋であつた。直進すると、まず台徳院の額がかつた、勅額門がある。さらに行くと中門、その左右に水盤舎、そして壮麗な台徳院

霊廟があつた。この霊廟は拝殿と本殿の二棟に分かれていた。

霊廟左から石段を登り、丸山古墳背後の台地に宝塔（墓）があつた。

現在のプリンスホテル高層ビル辺りである。また、台徳院霊廟の右隣に並ぶ形で崇源院殿（正妻、於江与の方、淀君の妹）の壮麗、明媚な御霊屋。それがいかに豪華なものであつたかは、江戸時代に崇源院殿の廟の改築が行われ、その一部が鎌倉建長寺の仏殿に移築され、今日も目にし、伺い知ることができる。

北廟の文照院、有章院の御霊屋は、江戸建築最後の豪華さを秘めている。現存するのは、有



◆台徳院殿配置図

章院殿入り口の二天門のみである。しかし、残された写真などでその一端が知れる。二天門を入ると灯籠が列をなしており、その背後に御霊屋があつた。現在のプリンスホテル全面の地域。その建築美と内部装飾の美しさは、日光の東照宮を想像すればよい。江戸時代には、将軍と大僧正しか参詣を許されなかつた、これらの御霊屋ではあるが、時代が変わると、庶民が訪問できるとなる。アーネスト・サトウは、その時の感激を次のように記している。「燃えさかる炎のような金色の彩色と精巧なアラベスク模様に包まれ、晴れた日を選ぶと特に、その輝くばかりの美しさに目をくらませる」。

全ては、第二次世界大戦の爆撃で灰燼に帰した。もし爆撃が無かつたら、日光の東照宮と並ぶ、あるいはそれを上回る存在、国宝としての値打ちを示し続けていたことであろう。

将軍の宝塔（墓）

北廟の各将軍の宝塔は、御霊屋の奥に一列に並んでいた。北に向かつて六代家宣、十二代家慶、皇女和宮、十四代家茂、七代家継、九代家重の順である。それぞれの階段を上り詰めると台座があり、銅造または石造の宝塔が聳えていた。その下に石室。木棺が納められている。

昭和三十三年に改葬が行われた際に建築学、考古学など各専



◆有章院奥院唐門



◆有章院靈廟仕切門



◆文昭院靈廟本殿

門家による総合調査が実施された。遺体調査を担当された東大理学部人類学教室の鈴木尚教授の報告によると、北廟の將軍たちの遺体は、やや華奢であつた。しかし、南廟の秀忠公の遺体は鎮座したまま、小石などの落下によつて圧縮された状態にあつたが、骨、筋肉は他の將軍とは異なり、逞しく、十分に鍛錬された肉体の持ち主であつたとのことである。

秀忠公については、凡庸なるが故に家康公の遺志を愚直なまでに実現したとの評価があるが、この二代目が勇気をふるつて内政の治安体制を築いたからこそ、徳川二百六十年の平和な歴史があつたと思う。時代は戦いの才能よりも政治の才能を欲していた。信長、秀吉いずれも二代目が不運であつた。秀忠公のラジカルな政策は驚くべきもので、その十八年間の治世で家康側近の部下まで改易や移し替えを行い、徹底した幕藩体制を築いている。よくこれだけのことをして造反劇が起きなかつたものだ。

増上寺門前町

増上寺門前町は、芝大門から東海道までの縦線をそのまま赤羽川まで伸ばし、将監橋から金杉橋幅の区画。大門右には芝神明宮。その前が神明宮門前町、七軒町。庶民の町並みは、ここまではお堀から金杉橋まで東海道を挟んで細長く続く。金杉橋を南下すると、町幅は急にふくらみ、芝金杉通り一丁目〜四丁目の繁華街。さらに入間川、芝橋を渡ると、ここからは江戸湾に直接面し、本芝一丁目から四丁目の漁師町、通称、芝浜……と展開する。

「芝で生まれて、神田で育つ」と江戸言葉にあるように、これらの町は、活況を呈し、生きのいい江戸っ子の気^きっ^ぶ風に溢れていた。幼少期には、芝の明るい環境で過ごし、青年期には神田の活気で育つ。「くよくよしない」江戸っ子の理想の育ち方というわけである。これらの町を順に描写してみたい。

神明宮

町民と接する、芝神明宮は「だらだら祭り」で知られるが、これは全国から人々が集まり、祭りが十日間にも及んだからである。ここで起きた、町火消しと神明宮勧進相撲の関取とのいざこざは、歌舞伎の「め組の喧嘩」として名高いが、ことの是非はともかくとして、江戸時代いかに活況を呈していたかを想起させる。大門には、絵師が描いた銅板があるが、着飾った女性たちがひしめいて自由を謳歌している。

新銭座（しんせんざ）

芝大門から浜松町方面に向かい、旧東海道を通り越して駅の前を左折して線路伝いに行くと左側一帯が旧新銭座町でここに慶應義塾があった。一八五八年（安政五年）に福沢は中津藩下屋敷（築地、明石町、聖路加病院付近）に蘭学

塾を開き、十年後の慶応四年（明治元年）にこの地に独立移転し、年号をとって慶応義塾とした。僅か三年ではあったが、名称の起源からすればここが慶應義塾発祥の地とも言ってよい。一八七一年（明治四年）慶應義塾は三田の現在地に拠を移した。入れ替わりに近藤真琴の攻玉社がやってきた。近藤真琴は偉大な教育者で和魂漢の学問に理学を持ち込んだ。ために海軍兵学校に進むものが多く、日露戦争の広瀬武夫や今時大戦の終戦処理を行った、鈴木貫太郎首相などの逸材を生み出している。このような素地は、増上寺学都の故に成立したと思われる。

赤羽川（現在の古川）風景

江戸時代、大門から増上寺学寮伝いに品川方面に向かうと赤羽川にぶつかる。ここまでが増上寺で、右手の堀の角、内側には西蓮社があり、将監橋に出る。この川を海方向に一本行つたと

ころが東海道金杉橋。この辺りから海までを処の人々は新堀川（または金杉川）と呼んだ。将監橋から右手岸の増上寺子院や学寮に沿っての上流は、地名に沿って赤羽川と呼び、赤羽橋が架かっている。この川の行く手が渋谷川である。

歌川広重が「名所江戸百景」でこの辺りの風景を描いている。右辺に壮麗な五重塔を配し、眼下に赤羽川が青々と流れ、緑なす自然の入り込んだ高い土手が美しい。赤羽橋を渡ると川に沿って中之橋まで大きな広場がある。ここでは毎朝盛大な肴市が立っていた。江戸湾で捕れた豊富な魚介類を川舟で運び、新堀河岸や揚げ場から水揚げする。上流に向かって広場の左側には、筑後久留米藩二十一万石、有馬中務大輔^{なかつかさだいふ}上屋敷の長い塀が見られる。同藩は、増上寺の火事警護を仰せつかっていた。敷地は二万五千坪もあり、邸内の丘の上に火の見櫓がある。これは江戸で一番高い火の見櫓といわれていた。当時、江戸っ子は「高いもんだ有馬の火の見」

と呼んだ。また、屋敷の一角に（中の橋の前方）に水天宮があり、白い幟が立っている。毎月五日の水天宮参りには安産、水難除け、水商売のご利益を祈願し、大勢の参拝客で賑わった。この水天宮が明治の御世になつて人形町現在地に移転したのである。

芝浜

金杉橋を渡ると東海道を挟んで、芝金杉通り



一〇四丁目の民家がひしめく。さらに入間川の芝橋から先が本芝一〇四丁目である。通称、芝浜。ここから東海道は全くの海縁^{うみべり}を走る。帆立舟が行き交い、想像を絶するほど美しい風景である。広重は月夜の光景など多くの作品を残している。海に面した砂浜には網干場があり、鹿島神社にぶつかる。芝浜漁師町は江戸時代大きな魚産地帯で、美味な肴^{さかな}が多く、江戸っ子は芝肴と称して賞味した。後に「江戸前の魚」なる言葉を生み出し、また、浅草のりの産地としても著名であった。当然、雑魚場^{ざこば}（魚河岸）を形成しており、江戸庶民が一般的に、この地を雑魚場と称した由縁である。

「芝浜」といえば落語を思い起こす。円朝の三題噺に端を発したという、この物語は江戸の庶民感情をよく表現している。酒におぼれ、仕事に身が入らぬ棒手振り魚屋の勝五郎は、あ朝、女房に尻をたたかれ、いやいやながら芝の魚市場に向かう。ところが眠い目をこすって

行ってみると、早過ぎたのか、まだ市はやつていない。しかたなく、芝浜に出て、一服。ふと見ると豪華な財布が砂浜に落ちていた。開けてみると目にしたこともない大金。勝五郎は飛んで帰り、さあ、それから友人を呼んで、飲めや、食えや、歌えや、の大判振る舞い。翌朝、目を覚ますと金もないのになんてことしたんだいと女房。あれがあるだろうと部屋中を探す勝五郎。夢みてるんじゃないよ、と女房。それから心を改め、酒を断ち、人が変わったかのように働きだし、三年後、ついに一軒のお店^{たな}を持つに至る。その大晦日に女房が神妙な顔つきで亭主の前に頭を畳にこすりつけ



る。女房は告白する。あの財布は本当だったのだ。大家さんとも相談し、盗んだとあれば死罪。^{おおや}ここは番所に届け出よう。ところが落とし主が現れない。結果、財布の中身はそっくり戻ってきた。だましてごめんなさいと涙する女房。ことの次第を聞いた勝五郎は、なにもかもおまえのお陰だと泣く。さあ、大願なつた今日は飲んでおくれと女房。下げは、口元まで杯を運んだ勝が『よそうや、また、夢になるといけねえ』。嘶のデッサン力で定評のあつた、志ん生の長男、金原亭馬生の十年に一度の、背後に後光がさしているような、あの高座が忘れられない。嘶の中で、芝浜の光景が、今、目にしているかのごとく浮かび上がる。

【参考文献】

「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」

伊坂道子編 境内研究事務局

「増上寺史」著者 村上博了 大本山増上寺

「描かれた港区」中 東京都港区立三田図書館

「骨」著者 鈴木尚 学生社

「殺せ。殺せ。皆殺しにしろ。大きいのも小さいのも、みんな殺せ。年寄りも若いのもみんな殺せ。赤ん坊の蛇も蛇は蛇。みんな殺せ。一人も逃がすな。殺せ。殺せ。みんな殺せ」と私達に向かって叫んでいるのは、兵隊でも義勇軍でもありませんでした。

彼等は私の近所の人達でした。一緒に育ち、一緒に学校へ行った人達でした。私の家に夕食に来た人達でした。

(イマキュレー著『生かされて』より)

今から十二年前、ルワンダでのフツ族がツチ族に対して行った大量虐殺の始まりだった。百日間で百万人のツチ族が虐殺されたという。

道路のあちこちに多数の死体が山積みになされ、野犬の群れに食いちぎられていた。彼女の両親や兄弟達も、大鉈やナイ

フなどで惨殺された。

当時十九歳だった彼女は、ある牧師宅に匿われたが、一メートル四方の狭いトイレだった。そこに七人の女性と九十日間も耐え抜いた。トイレの壁のすぐ側で「イマキュレーを探せ、殺せ」と殺人者達がしばしば叫んでいた。その声もかつての親しい友人達のものだった。

彼女が生き抜くことができたのは、神への強い信仰だった。またその信仰から大虐殺の後の刑務所で、母親と兄を惨殺した犯人に、怨恨の唾を飲んで「あなたを許します」と言ったが、その途端、彼女の心は和み安ら became ったという。

「恨みには恨みを捨てよ」とは法句経の教えるところ。また法然上人の父君の教えるところでもあった。

連 載

会いたい 関 容子 人



撮影／タカオカ邦彦

和田さんに初めて会った、というよりチラッとお見かけしたのは三十何年前、女性誌の著名夫人インタビュー「家内でございます」で、キンキンこと愛川欽也さんと新婚間もない和田夫人（シャンソン歌手の平野レミさん）を訪ねたときだった。当時のレミさんは威勢がいいのに、ときどき焦って口ごもるような独特のトークでラジオの人気者だったから、キンキンとはもちろん、放送関係の仕事もしていた私とも、少し顔なじみだった。インタビューを始めてじきに、和田さんは出かけるところで、軽く手を上げて通り過ぎただけだったが、そのときの印象はグラフィック・デザイナーというかつこいい呼び方そのままの爽やかさだった。

ずつとのちに吉行淳之介さんが和田さんのことを「育ちのいい青蛙」とからかって、いくら何でも青蛙はないじゃない？ と笑ったが、育ちのよさ、人柄のよさはその後何度も実感した。

それで今回。あのとときのインタビューで今もすぐよく憶えているいくつかのエピソードについて訊ねてみたい。

まず和田さんはとても匂いに敏感な人で、目を閉じてキスをする、あ、カレー、とか、納豆食べた？ とか当てられた、という話。この話のある人に何度かして、その度に受けた。「それは違うよ（笑）。匂いに敏感なのは彼女のほうで、ぼくと知り合う前の話。相手がキスしようかと近寄ってくると、前に食べてきたものが一発でわかって興ざめする、って話でしょ」

何だか三十数年来の私の誤解のほうが面白かったのに……。

次は和田さんにプロポーズされたことを作家である父君の平野威馬雄さんに話すと、あ、それは何かの間違いだ、すぐOKしちゃいなさい、と言われた話。

「まあ、OKはすぐに、とは言ったらしいけど、結婚は急ぐことない、せめて来年五月く

子供のころ、大阪での一枚。撮影者は俳優の滝沢修さん



らいでいいんじゃないか、って父親は。でも母親が、早く行きなさい、って、知り合った年の十二月三十日に出してくれたんだって。それが昭和四十七年、ぼくが三十六のときでしたかね」

二人の電撃的な出会いは、レミさんがテレビの深夜番組でシャンソンを歌ったり話したりしているのを見て面白いと思い、知人に紹介を頼んでいきなり食事をしたとき。

「彼女はそれが一週間前だと言っただけど、ぼくはもうちよつと経ってたと思うんだ。赤坂のTBS会館の地下にはTOPSやシドやざくろがあつたでしょう。彼女は久米宏さんとラジオの生放送に毎日出てたから、そこで待っていたら、黒柳徹子さんにパツタリ会っちゃってね。何してんの？ お茶飲みましょうよ、って言われて、TOPSに入った。あとになって、あなた、あるときこれから嫁になる人と会った、って言ってた、って言うんだけど、ぼくには覚えがないんですよ。や

がて彼女が現われたんで、隣りのざくろに行つてしゃぶしゃぶ食つてさ。そのときタレの味つけとか、材料とかを熱心に店の人に質問するのよ。ラジオの印象とは違つて、意外に家庭的な、それも料理に興味のある子なんだなあ、と思つたわけね」

のちに料理研究家として名を成す片鱗が既に現れていた、ということか。

そう言えば、レミさんのお嫁入り道具の中にカツオ節削りがあるのを見て、和田さんがとても満足そうだった、という話もあった。

「いや、最初に買ってきた所帯道具がカツオ節削りだったんで、ぼくが喜んだって話ですよ。彼女が来たときは手ぶらでね、パンツだけ持って来たよ（笑）。それでウエディング・マーチのレコードかけて、肉を買つてきて焼いて食べて、二人だけの結婚式。年が明けて区役所があいたらすぐ籍を入れて、それでおしまい」

なんてロマンチック！

和田さんが四つ五つのころの可愛らしい写真を見せてもらった。庭で虫捕りの網を持つてちよつとはにかんでいる。

「これ、撮影した人がすごい。民芸の名優、滝沢修さん。うちの親父（和田精）は築地小劇場の創立メンバーだから、滝沢さんとは仲間だったんだね。オヤジは舞台効果、音響を担当してて、戦前NHK（日本放送協会）が愛宕山にあった時代に、築地小劇場がユニツトで生放送のラジオドラマに出た。炭鉱の落盤事故の話で、事故の前とあとじゃ音が違う、というのを工夫してやったらしくて、その後NHKから誘いがあつたんだって。でも親父は、音だけの世界はいやだから、って断わったら、その人が、これからはテレビの時代ですよ、って。まだテレビは『イ』という文字がぼんやり映つたというだけの、試験放送の段階だったのにな」

やがて小山内薫の死（昭和三年）によって築地小劇場は分裂し、それを機にNHKに入

中学生の頃の和田さん。
これから描こうとするものへの目が印象的だ



社。

「そしたらいきなり大阪にやらされて、だからぼくが生まれたのも大阪の住吉区。滝沢さんは公演でもあって来たときに、かつての間を訪ねてぼくの写真を撮ってくれたというわけです。親父はそれでラジオドラマの演出も手がけたりしてたんですけど、戦争が始まると国威発揚のドラマを作らされて、それをいやがったんだね。築地出身だからアカだ、っと思われたのかも知れない。突然クビになって、昭和二十年の三月に東京へ帰ってきた。ぼくは小学校二年だったからはっきり記憶がある。汽車で一日半くらいかかって帰る途中、名古屋大空襲に出遭って、汽車の中は真っ暗で窓の外は真っ赤な火が見えて、すごく怖かった」

東京は世田谷にあった祖母の家に同居、幸い戦災に遭わなかったので、和田さんが就職するまでずっとそこに住んだ。

「父はなかなか転職できなかったから、民間

放送が始まるまでの五年間くらい貧乏だったね。昔の仲間がたまに放送劇の台本の仕事を回してくれたら、暇のようだから釣りでもしたら、って、見るからに上等そうな釣竿貸してくれたらすると、翌日にはもうそれ売って両親と兄と、一家で食べちゃってましたからね（笑）」

和田さんは元々絵を描くのが好きな少年だったが、似顔絵というものに強く関心が向いたのは小学校五年のとき。

「担任の先生が、今朝の朝日新聞の一面に載ってた政治マンガが、言葉がないのに今の政治の様子をすごくよく表わしている、って言ったのが頭に残ってて、子供だから新聞の一面なんか見なかったんだけど、その日うちへ帰ってすぐ見たの。それが清水崑のマンガだね、切り抜きが今もある。三党首会談の絵なんだけど、広いテーブルにポツンポツンと離れていて、一人がちよつとこっち向いてたり、

そういうバラバラの感じがとてもよくわかる。その日からマンガを切り抜くようになった」

当時、読売は近藤日出造、毎日はその須良輔が政治マンガを描いていた。似顔がよく似ている点では近藤日出造が一番のような気がするが、清水崑の画風には品格があつて、私も好きだった。

「中学生になつたころ、清水崑のエッセイ集が出て、さっそく買ってもらつて読んだら、交友録の件りに近藤さんのことを書いてた。こんな似顔のうまい人は当代ほかにはいない、つて褒めてて、でも一つ欲を言えば描き足らぬように描く工夫がほしい、と書いてあった。あんまり説明しすぎると品がなくなるんだよね。清水崑のこの文章はすごくよく憶えてて、影響受けたと思いますよ」

和田さんの描く似顔絵は、省略の限りをつくして点と線だけで成り立っている。だから上品この上ない。

それにしても、点を打つだけでその人物の眼の感じが伝わったり、一本の線で総てを象徴してしまう、あの表現力は何なのだろう。

「似顔は中学のころからよく描いてましたよ。ちよつと評判のよくない先生の特徴を捉えて描いたりすると友だちが大喜びしてくれました。プロになつて、似顔絵の訓練をずいぶんさせてもらったのは『吉行淳之介軽薄対談』という本の装丁と挿絵を頼まれたとき（昭和四十年代）。三巻まで出たから各巻に二十一人ずつ描く。それでこの人は描けるけどこの人はどうも、なんてことは言えない。しかし男の人はだいたい似るんだけど、美人女優というのが困りましたね。でも浅丘ルリ子は似るんだけど、吉永小百合となると難しい」

この『軽薄対談』で似顔絵を描かれた一人の小沢昭一さんかその絵を気に入って、年賀状に刷らせてほしい、と電話してきたとか。

「そう。でも無断で使っちゃう人もいる。ぼくは酔っ払うと似顔を描くことがあるらしく

て、どこかのパーティーで、あなたが十年前に描いてくれた似顔絵を今名刺に刷つてます、なんて見せられたりすることがあるけど、全然憶えてなくて」

実を言うと私も、吉行淳之介さんからいただいた葉書の宛名書きの「様」を取つて、名刺を無断で作ったことがあった。閑話休題。

さて、これもどこかで聞いたゴシックだが、パリの似顔絵描きが和田さんの顔を描き始めたので、こつちも相手を手早く描いたら、あまりの腕の違いに驚いて、シツポを巻いて退散したという話。まるで『大菩薩峠』の机竜之介が宿屋の二階から尺八を吹いて、うるさい尺八吹きを追い払った、というのに似ていて愉快だった。

「それもちよつと違つてるよ。まず場所はメキシコ。かみさんと、かみさんの妹と三人で旅して、マリアツチ広場つて飲み屋がいっぱいあつて歌が聴けるとこへ行つてみよう、つてタクシーに乗ったら、運転手が途中で車止

めて花屋へ寄つて、クチナシの花を買つてね、女二人にプレゼントだつて。さすがラテン系の男だつて感心してたら、飲み屋にも一緒に行く、つてついてくるのよ。これはタカられるのかなと思つたら違つて、あとでわかつたんだけど自分のは自分で払つてた。で、女性陣がマルガリータを注文したからばくも、つて言つたら、男はテキーラでなきや、つて言われて二人して飲んでた。そこへ似顔絵描きが来て、かみさんの妹は初めての海外の旅だし、面白がつて、描いて描いて、つて言つたら描き始めたんだけどすごい時間がかかんのよ。それがいかにもメキシコの人つて感じの顔で、描きやすい顔だったから、見せる気なもなくコースターにサツサツと数秒で描き終えたら、運転手がパツと振りかざして見せちゃつた。そしたら急に汗なんかかき出して（笑）、気の毒なことをした、つて、それだけの話」

（つづく）

- 忍を行ずれば、怨を息^やむることを得。
- 忍辱は怨に勝つ

『出曜経』 怒忿品

- 「さまざまなる苦難、悲しみを」

堪え忍んでいけば人を恨んだりする心がなくなります。

- 「さまざまなる苦難、悲しみを」

堪え忍んでいけば人を恨んだりする心に打ち勝つことができます。

『出曜経』：原始仏典の中から仏教の肝要を著した詩句を取り集めて編集し、それにまつわるさまざまなエピソードを交えながら詩句に注釈を施してある経典。

「お父さん、これ見て、これこれ」

妻がにやにやしながら、その日届いた一通の封書を差し出した。

宛先は私、差出人は東京の実家にいる私の祖母。誕生日が敬老の日に近いこともあり、敬老の日にあわせて信州名物「おやき」を送っておいたのである。

その礼状であろうことはすぐに察しがついたが、それにしても妻がせかすように「ここ、ここ」と指をさす。

何事かとその指の先をよく見てみると、郵便番号の数字が何桁が多い。まったく枠を無視しているのである。しかも長野市のこの辺りは三八〇で始まるのに、〇二六云々。見覚えがあるはずもないのに、何となく馴染みのある数字。

「あれ、これ、うちの電話番号じゃない？」

道理で、七桁のはずの郵便番号が三桁も多くなっているわけだ。

十桁の郵便番号、二人で大笑いした。

でも二人が大笑いしたのは、その間違いがおかしかったからではない。私も妻も、祖母が自分で手紙を書いていること自体がそこはかとなくうれしかったのである。

祖母は明治四十二年の生まれというから今年で九十七歳。

東京は下町、本所深川の生まれ。縁あって、下町のお寺にとつぎ、男女七人の子どもたちに、十三人の孫と十三人のひ孫。長寿に加え、孫・ひ孫に恵まれた人生は一見すれば「幸せ」そのものである。

だが長寿である分、悲しい経験もそれなりに多い。関東大震災に東京大空襲。私が実家にいた頃、時たま祖母は「あの時は」とふと語り出すことがあった。きつと切なさの年輪を思い出していたのだろう。

先年、祖母は寺を継いだ長男（私の実父）を失った。葬送の日、祖母はみなぎが止めるなか火葬場まで同行し、火の入った窯の前で、いつまでも息子の棺をなで続けていた。

九十三歳にして七十歳の息子に先立たれる悲しみ。わが身を引き裂かれんばかりの心痛であるのか想像もつかないが、愛別離苦の悲しみはそれだけにとどまらなかった。今年の五月、近所に居を構えていた次男（私の叔父）が突然の病で亡くなってしまったのである。

享年六十五歳。寺が忙しい長男にかわって、なにくれとなく祖母の世話を焼いてきた。枕経に駆けつけた報告を祖母にした時、祖母は静かに「遠いのに、すまなかったね」とだけ口にした。

この夏、猛暑のなか、祖母は食欲を失い点滴に頼らざるを得ない日々を送ることになった。体重も三十キロを切り「老衰」という言葉が、誰の目にも現実味を帯びてきた。叔父の死も相当堪えているはずである。「来るべき時は、そう遠くない」と誰もが覚悟した。

しかし、祖母はこの夏を乗り切った。いかに気落ちしていようとも、息子の死を自分の命の終焉に結びつけては母親失格と氣力を振り絞ったのだらう。

仏教では、さまざまな苦難に耐えて仏道修行にいそしむことを忍辱（にんにく）という。部屋のベッドで点滴を受けるだけの祖母。けれども愛別離苦の悲しみを誰かのせいにしたり、それで誰かを恨んだりしては仏道を踏み外してしまふ、死んだ息子にも申し訳ないと懸命に戦っていたのである。

祖母は元気を取り戻し、何事もなかったかのように贈り物の礼状をしたためた。十桁の郵便番号、悲しみに堪えてきた祖母の忍辱を読み取ろうというのは孫のひいき目であろうか。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

袖山榮眞 SCREEN

シネマ随想

手紙

監督
生野慈朗

©2006「手紙」製作委員会



11月3日(金・祝) サロンバスルーブル丸の内ほか全国松竹・東急系ロードショー

郷隼人^{ごうすんと}という歌人をぞぞんじだろうか？

カッコ良すぎるこの名が本名である可能性はともかくとして、殺人の罪によって終身刑に処され、二十年もカリフォルニア州の刑務所に服役する日々の、非日常的日常を三十一文字に纏めて『朝日歌壇』に投稿し続けておられる。このところ久しく入選歌がないので、ひよっとしたら「おられた」と書くべきなのかもしれない。かれの歌集『ローンサム・ハヤト』に次の一首があり、小説及び映画『手紙』のテーマが、ここに凝結している。

加害者の己れ以上に何倍も

苦渋味^{フアミリー}わう双方の家族

今秋の各紙読者欄で話題となっている奥野修司氏の『心にナイフをしのばせて』は、被害者のファミリーの視点から、かれらの苦渋の巨細を読者の眼前に活写するが、期せずして絶妙のタイミングを以て、加害者のファミ

リーの苦渋にスポットをあてる形になり、なおかつ「救い」も模索するのが、映画『手紙』である。

たとえば殺人というような犯罪について、
犯行↓裁判↓処刑↓改悔↓更生という加害者の辿るべきプロセスに続いて、加害者以外による「許容」という大らかなプロセスが期待されるが、公平な（というより無責任な）第三者と「双方の家族」との間で、態度もしくは見解において千差万別が予測されるのは、改悔、更生の評価であり、「雲泥の差」の生じかねないのが、最後の「許容」であろう。
『ローンサム・ハヤト』及び『遺愛集』（島秋人）から、似通った二首を引用しよう。

一瞬に人を殺めし罪の手と

うた詠むペンを持つ手は同じ（郷）

この手もて人を殺めし死囚われ

同じ両手に今は花活く (島)

歌集を読む我々は、改悛、更生を充分に評価し、許容の心境をもって作品及び作者に無限の感情移入を惜しまないが、被害者の家族においては、よしんば、改悛と更生とを認めても許容の段階に達するのは至難とせねばなるまい。

『手紙』において、この至難の業を、しかも巧まずして成就するのが「手紙たち」なのだ。マイナス効果しか期待されなかった手紙も、映画全編の中で行き交う「手紙たち」全体の中で重要な役割を果たし「手紙って、メチャ大事なんや。命みたい大事な時、あるんやて」とのセリフの重みが、かの道元禪師の「愛語能く廻天の力あることを学すべきなり」の金言さながら、プロットの展開とともに肚にこたえてくる。

『手紙』で、手紙を発信あるいは受信するのは、A強盗殺人罪による無期懲役・服役囚の

武島剛志、Bその弟、直貴、C被害者緒方敏江の長男、忠夫、D直貴の恋人(後に妻)由実子、及びE平野という秋葉原の家電量販会社・会長である。

そもそも剛志が強盗殺人を犯したのも、弟の大学進学費用を調達しようとの目的からであつたのだから、月一回だけ許された定期便が兄弟間に交換されるのは当然の成り行きだったが、刑務所内からの郵便物に捺されるサクラ・マークの検閲印から、弟は職を失うことになる。前記「許容」について、第三者を「無責任」と註したが、直接「関わり」のない限り「公平かつ大らか」な第三者たちは、その条件が失われた瞬間、豹変するものなのだ。芸能界へのデビューの切掛けにせよ、セレブ令嬢とのラヴ・ストーリーにせよ、幸運の女神が微笑みかける、その都度、「殺人者の弟」の烙印が全てを御破算にする。だから家電量販会社に就職できた時、弟は兄への発信を停止し、無断転居することによって、受信

の自然停止も謀るのだが、ここでも、ひよんなことから「殺人者の弟」であることが、会社執行部の知るところとなり、セールス現場から倉庫管理に配置転換の憂目を見る。

或る日、いわゆる「おしのび」で倉庫を訪れた会長・平野から「激励」をうけるのだが、原作『手紙』及び映画の『手紙』両者に托された、メッセージのエッセンスというべき、この「激励」の内容には、読者、観客として直接ご対峙ねがうこととして、平野をして「激励」に赴かせしめたものが、DからEに向けられた手紙であったこと、そして音信不通の筈だったA・B間の往復書簡が、Bを偽称するD、とAとの間に連綿として続けられていたことが、AからCに宛てられた手紙に反映し、前述のCによる「許容」の要因となる点にご注目を促したい。

例によって蛇足を三本

一、過去に五回候補にノミネイトされながら

デビューから二十年目、ようやく今年一月第一三四回直木賞に輝く、東野圭吾さんの受賞作『容疑者Xの献身』は雑誌連載中、『容疑者X』と題されていた。思えば東野さんの作品には、登場人物の「献身」が、プロットを展開させることが多く、『手紙』の魅力も、Dつまり由実子の「献身的」行動に負うところ大である。現代日本人が忘れかけているかに思われる「献身」の、空しからざることが例証されている、と思いたい。

二、奥野氏『心に……』に、勢至丸の心境を憶測させるくだりがあった。「(愛児を惨殺した犯人に対する)殺意を消せないからといって、それを本当に実行したら人の道に反する。だからといってそれを抑えることは容易ではない。……父は胸の裡に巣くっていたその殺意を封じ込めるために、キリスト教に逃れたのではないだろうか」。

三、直貴が発揮する芸能の能力を、映画化に際して、バンドのボーカルから漫才のボケ役

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-245231

に変更したのは大ヒットだった。刑務所を訪問する芸能者の一人として舞台に立つ直貴は、原作では「声が出ない」のだが、映画版では相方の誘いに応じて「バカな兄貴」のアラ探しを連発する。このシーンにカブせて「せつないウソをついて」とか……そして「あなたに会えて本当に良かった。嬉しくて嬉しくて言葉にできない」という小田和正さんのボーカルが、兄弟をつなぐ勁い絆の存在を、頼もしい声量でメロドラマチックに立証

してくれるのだ。このシーンで兄が秘かに合掌しているのは原作通りだが、本誌六月号で筆者が激賞した『単騎千里を走る』の李加民役に勝るとも劣らぬ量の涕と涙とを惜しみなく流し続ける演技は、原作のインパクトを何倍かに増幅させる、演出者と俳優による協同作業の、瞠目すべき成果であろう。そうだが、エンディングロールと共に流れる、高橋瞳さんの『コ・モ・レ・ビ』にも賛辞を捧げておきたい。

(長野・十念寺住職)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●月

〔特選〕**霊送る浜へ海月の迎え来る**

井村 善也

魂迎え・魂送りの風習は、土地によつてさまざまだが、ここでは家の門口でなく海岸で行われている。魂を送りに出ると、空の月のその影のように海月が浮かんでいる。これは魂を迎えに来てくれたのだ。

〔佳作〕月今宵信貴山に見る大絵巻

河合富美枝

皓皓と利尻富士嶺の盆の月

工藤 浄真

夕月夜散歩の犬に懐かるる

寺下 忠至

●栗

〔特選〕**遠来の友お持たせの丹波栗**

内藤 隼人

丹波栗という大粒のものとかわれがちだが、その地に産する栗の総称のようだ。しかしわざわざ遠くから持ってきてくれたのだ。

大粒のつややかなものと思うのがよからう。
「遠来」「おもたせ」が利いている。

〔佳作〕 厨辺に座して栗剥く母の背な

中島富士子

茹で栗を分ける子供ら顔きびし

山口 信子

初物の栗いっぱいのご飯かな

伊藤寿美子

●自由題

〔特選〕 穴蜂の獲物引き込む面構え

石原 新

穴蜂は自身より大きな昆虫を土中に引き込んで、それに卵を産むという。いま大きな獲物を引き込もうとして必死である。その顔付きを作者はじつと見つめているのだ。「面構え」の語が句を生かした。

〔佳作〕 満月のあめりかにゐる男の子

十条 苑を

秋の夜の影絵の指がピストルに

狭山 棹

墓参りホームステイの子も連れて

西井 正



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

寒紅

去年今年

自由題

月

山の月傷紙めてゐる犬あらん

山口 信子

月の谷吊り橋深く影落とし

浜口 佳春

夕月に足取り軽き散歩かな

伊藤寿美子

名月を静かに待ちて老いの窓

増田 信子

月今宵机上のメモの走り書き

中島富士子

月影の謡いし宗歌胸篤し

飯島 英徳

借景の山に懸りて居待月

佐藤 雅子

栗

落ち栗は吾がものと虫顔を出す

石原 新

栗の毬絵手紙いっばい描きけり

増田 信子

風さやか毬栗の絵と替える軸

金谷 友江

母の忌や今年も炊きて栗の飯

佐藤 雅子

締切・二〇〇六年十一月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

落栗や三猿仏の頭を越えて

河合富美枝

栗のなき利尻に見ゆる菓子栗

工藤 浄真

自由題

夜の秋もう一枚と書に向かう

伊藤寿美子

梨の傷芯まで通る終戦日

井村 善也

粒太き二百十日の俄か雨

浜口 佳春

落語聞く耳ふくよかな浴衣かな

増田 信子

手に足にひと日の疲れビール飲む池田

伊吹

甲羅干す足裏白き夏の浜

東 保

夏木立神事の神馬足揃う

一丁田美恵

足で足洗う農夫や秋の水

北川 弘子

二の腕に日焼けを作り孫帰る

東 保

整理なお尽きざる遺品虫の夜

蘭田 郁子

朝顔や余生も十指折れば足る

直田 豊人

こぼろぎのひとつがしきり夜の更けり

中島富士子

青年の如き顔あり敬老会

工藤 浄真

盆済みて夫は浄土の仲間かな

金谷 友江

秋の蚊にいと容易く刺されたる

佐藤 雅子

老鶯の遠音に日々の生活かな

河合富美枝

さっちゃんはネッ

35

かい

かまち♡ひろう



編集後記

行く秋の惜しむ暇なく小犬かな 岱潤

この半年間だけで、どれだけの親による子殺し、子による親殺しの事件があっただろうか。

犬山寂光院の住職松平実胤師は、その著書『喜び上手』の中で「誕生なんて、自分の意志と努力では到底及ばないところで決定される。自分では何も選べないのである。誰でも自分の誕生のドラマの脚本は、両親という監督から一方的に与えられるだけで、こちらで書き直しも書き加えも許されない。その配役に不満でも、愚痴を言っても始まらない。いや、愚痴は、言えと言うほど自分をみじめにする。(中略)では、どうしたら心やす

らかな幸せな人生が送れるか。それは、与えられた脚本を無条件に納得して、精一杯自分の役を演ずるしか道はない。ということはこの男を父として、この女を母として、この老人を祖父母として『良かった』と無条件に感謝する。そして与えられた人生を精一杯に生きる。これしか幸せになる道はない。」と述べている。『五体不満足』の著者乙武洋匡氏の言葉「障害があることは不便だが不幸ではない」に代表されるように、自らをわかってる人間ほど、幸せを多く感じとれるのだろう。「ありがとうと多く言っていると、ストレスが少なくなる」。これは斎藤茂太氏の言葉である。(長)

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻十一月号頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十八年十月二十日

発行 平成十八年十一月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三三七八)六九四七

FAX 〇三(三三三七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 800号記念事業



法然上人鑽仰会
HOUNENSHOUNIN SANGOUKAI

法然上人鑽仰会
月刊「浄土」
浄土の広場
月刊「浄土」検索

浄土

| お知らせ | 会員募集 | 浄土PDF一覧 | サイトマップ | メール |

 法然上人鑽仰会
(C)2002-2006 HOUNENSHOUNIN SANGOUKAI All right reserved

法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3月合併号で通巻800号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は1700名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800冊以上、総35000ページあまりの貴重な財産をPDF化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在400冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊『浄土』検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果から読みたい『浄土』を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすればPDFファイルが表示されます。お読みいただくにはPDFビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

これを機会にお近くの一人でも多くの方々に月刊『浄土』をお勧めいただき、法然上人鑽仰会の会員にご勧誘いただければ甚だ幸いに存じます。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

Jodo Shu
Buddhist Denomination
<http://www.jodo.or.jp>

法然上人
800年大遠忌
2011年・平成23年
浄土宗

法然セミナー2006

主催：浄土宗 後援：朝日新聞社
運営：法然セミナー実行委員会 協力：法然上人をたてる会
運営協力：㈱グループダイナミックス

人は誰も、一人では生きてゆけません。
人は、縁あって出会い、結びつき、寄り添って、強い絆を築きます。
私たちは、人が他者とのつながりを保てないこと、作れないことが
多くの現代的な問題の根源にあることに気づいています。
けれども何をすれば良いのか分かっていません。
そんな私たちの心に、法然上人の
「すべての命がひとつに結ばれ、共に生かし、共に生かされること」を
願う声が、強く響きます。

絆——いのちの接点

11月30日[木]

18:00～20:30 開場17:00

メルパルクホール

都営地下鉄三田線「芝公園」駅より徒歩5分
都営地下鉄浅草線「大門」駅より徒歩5分

入場料1,000円(全席自由)

基調講演

「家族の絆 — 親と子 —」

堀田 力
[弁護士]



対談

「子どもたちの未来」



藤村 志保
[女優]



みらい なな
[絵本翻訳家]

対談司会

小泉 顕雄
[参議院議員]



語りと影絵

「共に生きるよろこび」

[語り部]

平野 啓子



●お申し込み・お問い合わせは [法然セミナー 事務局]

入場券はお早めに!

0120-420-030

[フリーダイヤル 平日10:00～18:00]

●入場券販売

電子チケットぴあ Tel. 0570-02-9999 [Pコード: 607-976] 取扱店: ファミリーマート、サークルK、サンクス
ローソンチケット Tel. 0570-000-777 [Lコード: 31413] 取扱店: ローソン